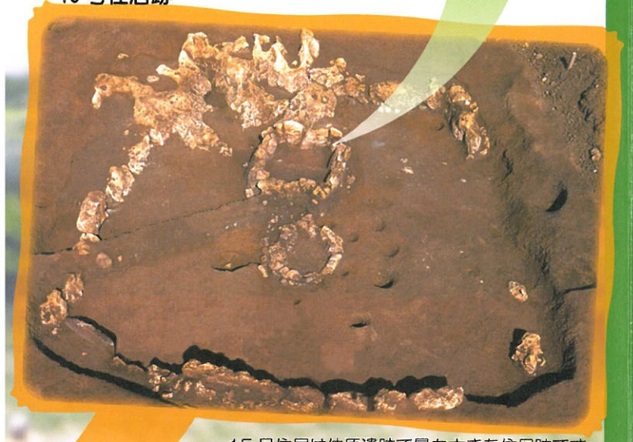
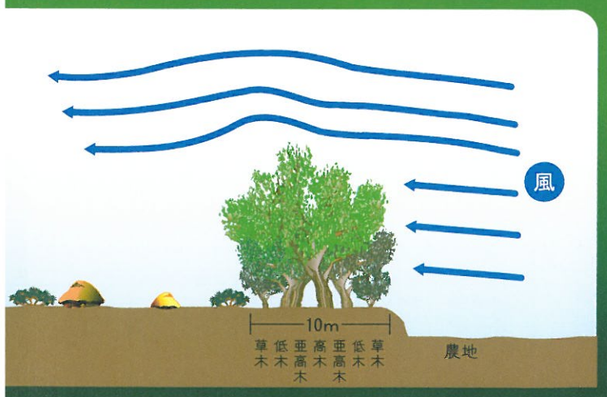
石組の炉跡（15号住居跡内）

15号住居跡



15号住居は仲原遺跡で最も大きな住居跡です。住居内には炉跡があり、中心的な建物であったと考えられます。

11号住居跡



伊計島の遺跡

犬名河（インナガー）

伊計島の北西の海岸沿いの崖下、石畳の坂道を下った場所にあります。伝承によると、昔、干ばつで困っていた時、崖下からずぶぬれになった犬が上がって来たのを見た農夫が、不思議に思って下りて行ってみると、こんこんと水が湧き出ている泉があったことから、犬名河という名がついたといわれています。

伊計グスク

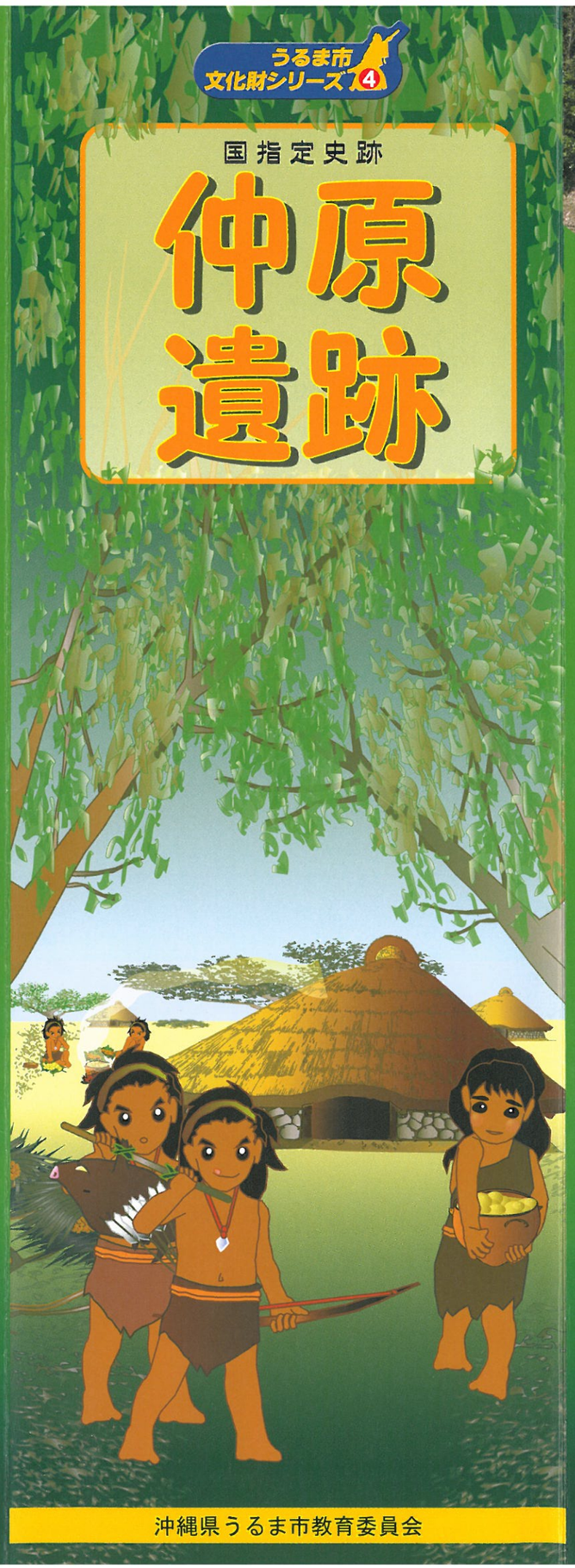
伊計ビーチ後方の丘陵で、「イチーグシク」とも呼ばれています。現在は伊計島との間に砂州が形成され、陸つづきになっていますが、グスク時代には海上に浮かぶ独立した小島であった可能性が強いとされています。陶磁器やグスク土器、須恵器などが採集されています。

沖縄県うるま市教育委員会
〒904-2392　沖縄県うるま市勝連平安名3047
TEL（098）978−7245

うるま市文化財シリーズ④

国指定史跡

仲原遺跡



沖縄県うるま市教育委員会

1号住居跡

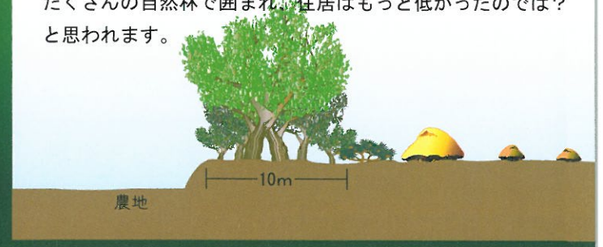
1号住居跡からは埋葬された人骨が発見されました

骨製品

石斧

仲原遺跡の風の通り道

仲原遺跡は、伊計島の真ん中にあります。島が平らな地形なので、図のように集落の周りに緑地を配置して、海からの強い潮風の影響を受けないようにしています。当時はもっとたくさんの自然林で囲まれ、住居はもっと低かったのでは？と思われます。



仲原遺跡
（なかばるいせき）

仲原遺跡は、伊計島のほぼ中央に位置する縄文時代晩期の遺跡です。発掘調査前の遺跡一帯はサトウキビ畑であり、土地改良事業の事前発掘調査として発掘調査が行われ多数の竪穴式住居跡が発見されました。その発見により、これまで不明であった約2000年～2500年前の沖縄における村落の広がりや住居の規模・造りなどが明らかになり、歴史的発見として話題になりました。

また、当時の暮らしがわかる遺物として、甕や壺などの土器、石斧、食べた動物や魚の骨あるいは貝殻を用いて加工した装飾品や生活道具なども発見されています。

そのことから、1986年（昭和61年）8月16日学術的価値が高い遺跡として、国の史跡に指定されました。

竪穴式住居

仲原遺跡で発見された住居跡は、地表面を角の丸い四角い形に掘り下げ、住居の壁は琉球石灰岩を用いて石垣を積み上げ、その上に屋根を葺いた造りです。建物の規模として径が５～６ｍの広さを持つ大型の建物と、２～３ｍの小型の建物２種類が発見され、大型の建物が母屋と思われます。

仲原遺跡では、数回にわたって住居の建て替えが行われており、新旧の前後関係が見られ、合計23棟の竪穴式住居跡が発見されていますが仲原遺跡の集落としての規模は、大型の建物の周辺に４～６棟ほど小型の建物が、母屋周辺を取り囲むように形づくられていたと考えられています。

参考文献「史跡仲原遺跡　保存整備事業報告書」（与那城町教育委員会 1997年）

竪穴式住居でのくらし（想像図）

住居の復元

仲原遺跡の住居復元にあたっては、県内の民俗事例を参考に赤土を石垣に埋め、柱や屋根材はこの地域の民家に多く使われているヤラブ（オトギリソウ科テリハボク）と竹、チガヤ（イネ科チガヤ）を用い、アダン（タコノキ科タコノキ）の根を材料にした縄を使用しています。これらの材料は地元伊計島ならではのものが多く使われています。

参考文献「沖縄貝塚時代中期のミステリー」（沖縄県立埋蔵文化財センター 2005年）

沖縄貝塚時代の歴史年表

今からどれくらい前か	時代区分		沖縄の様相
	旧石器時代		狩猟・採集の生活 鹿骨や角を加工して道具とする 主として洞窟に住んだ
12,000年前			
7,000年前	縄文時代	早期	爪形文土器（ヤブチ式土器）と刃部磨製石斧を使用する 曽畑式土器が入る
6,000年前		前期	土器の個性化がはじまる 爪形文土器
5,000年前			
4,000年前		中期	先島に石器時代人現れる
		後期	市来式土器が入る 琉球石灰岩崖下に貝塚を形成した 伊波・荻堂式土器を使用する 伊波式土器 貝・骨製の装飾品がつくられる 荻堂式土器
3,000年前		晩期	琉球石灰岩台地に竪穴式住居を建て、集落を形成する 弓矢の使用 仲原遺跡で仲原式土器が使用され、集落が展開する 明刀銭（B.C.三世紀鋳造）が入る 仲原式土器
2,000年前	弥生時代～平安時代並行期		海岸砂丘上に集落を形成する 尖底土器を多く使用する 木綿原遺跡（読谷村）で箱式石棺を使用する 九州弥生中期の須玖式土器が入る 貝交易が盛んに展開され、九州から弥生土器や金属器がもたらされる 平底土器を多く使用する アカジャンガー式土器
1,500年前			丘陵上で生活するようになる 616 この頃南島から日本本土に往来する 開元通宝が入る 753 鑑真ら阿児奈波島に漂着する
1,000年前			土器が無文化するようになる

土器

遺物のなかで最も多いのは煮炊き、貯蔵、運搬などに使われた土器です。壺形、甕形、外耳付の鉢、ミニチュア壺など様々な形のものがあります。

（沖縄県教育委員会蔵）

石斧

木などを割ったり、あるいは切ったり、削ったりする道具として作られた石製の刃物で、厚く太い石斧、カミソリ刃状石器などがあります。

（沖縄県教育委員会蔵）

装飾品

大型のホオジロザメやアオザメ、イタチザメの歯に穴や抉りを施した垂れ飾りがまとまって出土しました。

（沖縄県教育委員会蔵）

仲原遺跡の復元整備

沖縄初の復元住居遺跡である仲原遺跡は、縄文時代の人々の暮らしを肌で感じる場や、縄文時代の体験学習の場として整備されました。整備にあたっては、発見された住居跡などの遺構を保護するために、遺構全体に厚さ70㎝の盛土を行っています。復元された建物は地下にある遺構の位置や形を再現し、崩れた壁や屋根部分については、県内の建築史や民俗学の事例を参考に復元しました。また、復元住居周辺には遺跡の環境に即した植物を植栽し、将来縄文の森になるよう考慮されています。

所在地	うるま市与那城伊計1972番地
指定年月日	1986年（昭和61年）8月16日
指定面積	4758㎡
整備期間	昭和62年～平成8年度（10年間）

イラスト／伊禮頼子